

信仰のかたち - 宝篋印塔 -

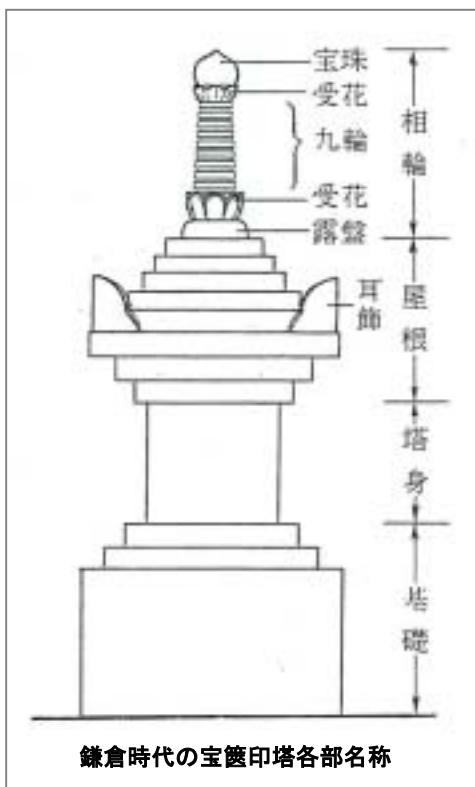
平成15年9月～ 常設展示理外展示場

平成15年8月、宮地町石原地区の宝篋印塔及び薬師如来などの仏像が、八代市立博物館に寄託されました。この地は、江戸時代には薬師堂があった場所で、現在お堂はなくなりましたが、同地区の個人宅に当時の薬師如来などの仏像と宝篋印塔が伝えられていました。

【宝篋印塔の信仰】

宝篋印塔は、内部に『宝篋印陀羅尼經』という經典を収めた塔であることから、こう呼ばれています。『宝篋印陀羅尼經』には、一切の如来(さとりを開いた仏)の功德を念じこめた呪文(陀羅尼)がしるされ、これを収めた塔を礼拝することによって、罪を消滅し、生きている間は災害から逃れ、死後は極楽に生まれ変わると説かれています。

日本での宝篋印塔の信仰は古く、飛鳥時代から始まったとされます。古くは木製の遺品が伝えられていますが、石造の宝篋印塔が作られるようになったのは鎌倉時代になってからです。しかし、この時代以降は、本来の目的とは違って、公家や武士の墓塔あるいは供養塔として立てられることが多くなります。



宮地石原地区伝来の宝篋印塔(八代市立博物館寄託)

【宝篋印塔の形】

宝篋印塔の形は、一度覚えると、誰でも一目見てそれとわかる特徴を持っています。

一番上には「五重塔」などと同じ形の相輪。次に階段状の屋根がありその四隅には耳飾という装飾があります。この相輪と屋根・耳飾の形が、宝篋印塔の特徴を示す部分です。

中央の塔身は、種子(一字で一つの仏をあわらすインドの文字)が刻まれ、塔の最も大事な部分です。下段は基礎と呼ばれ、銘文が記されています。

【宝篋印塔から発見された経筒】

この宝篋印塔は、江戸時代の享保7年(1722)に作られたものです。塔身は内部がくりぬかれ、中には銅製の筒に入った『宝篋印陀羅尼経』が収められていました。

つまりこの塔は、宝篋印陀羅尼を信仰する本来の目的で作られたことがわかります。江戸時代の宝篋印塔は、墓石または供養塔として立てられることが多く、塔内から経典が発見されることは極めて珍しいことです。

残念ながら、長年の風雨にさらされた経典は朽ち果てていますが、発見された経筒には「宝篋印陀羅尼経」と刻まれ、経典の名が確かめられる大変貴重な遺品です。



塔内部から発見された経筒と宝篋印陀羅尼経

基礎の部分には、銘文が刻まれています。「家国安
人民歡喜」「もしこの塔を拝み一礼すれば、悪を打ち破り、
菩提(仏)の道は開ける」といった、宝篋印塔の功德が説
かれています。

塔基礎部の銘文

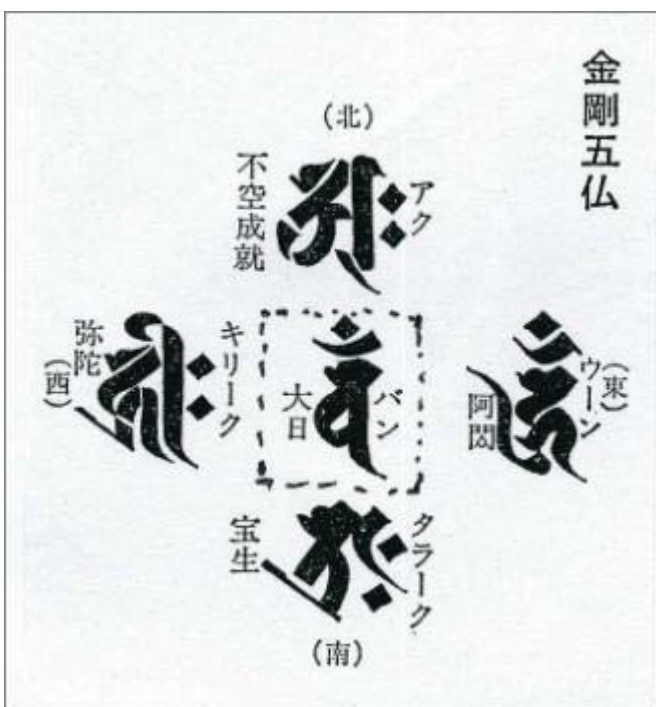
「家国安
宝篋印塔
人民歡喜」

「若於此塔
一瞻(せん)一礼」

「惡趣門破
菩提路開」

「享保七年壬寅
三月吉祥日」

【塔身に刻まれた仏の世界】



←塔身

塔身には真言密教の金剛界曼荼羅に説く仏
東の阿閼如来、南の宝生如来、西の阿弥陀如来
北の不空成就如来を意味する種子(一字で一つ
の仏をあわらすインドの文字)が刻まれ、中央に
は文字こそ刻まれていませんが、曼荼羅と同じく
大日如来がいることを意味しています。

つまり、ここには金剛界に住む五仏の大宇宙
が象徴されているのです。

(解説 石原)